

川崎先生より、京大広報 2014.11 に掲載の随想“地球科学と「ふるさと」意識”

の本研究会会報への転載をご承諾いただきました。

地球科学と「ふるさと」意識

名誉教授 川崎一郎

今年の6月、『防災と復興の知 3・11以後を生きる』を大学出版部協会から上梓させて頂いた。哲学者（座小田 豊 東北大教授）、水産学者（田中 克 京大名誉教授）、地震学者（川崎）が、それぞれの分野で、東北地震を契機に、我々が何処から来て何処に行こうとしているのか、考えていることを述べ合った。田中先生は、よく知られているように、「森里海連環学」の提唱者である。

2世紀末、奈良県桜井市北部で山地と接している低位段丘面（数万年前に形成）に纏まき向むく遺跡群が出現した。そこは、多くの考古学研究者から、戦いに明け暮れた弥生時代を終息させて平和をもたらした卑弥呼の王都と想定されている。3世紀中頃には、纏向遺跡群の南端に巨大な前方後円型古墳が造営された。卑弥呼の墓と想定されている箸墓古墳である。その後も、古墳時代の王都の多くは低位段丘面や中位段丘面（数万年～10数万年前）に作られた。段丘面は、洪水や土石流のリスクが低く、そのため形成時の特徴を残している場所である。

私は、このような認識を足がかりに、「私たちが歴史的建造物が建ち並ぶ奈良公園や京都東山の風景を美しいと思うのは、纏向遺跡以来、山地と段丘面が接している場所が安全の場であり、祈りの場であった2000年の時間が凝縮されているからではないか」

と、歴史都市の美意識についての考えを述べた。

そこから歩を進め、「地震、洪水、土石流などによって生活インフラが破壊され、人々が長く苦しめられたに違いない災害を無視してきた歴史学」と「日本の社会を脆弱にした格差や、災害をアジアの発展途上国に転移した自由貿易の負の側面を無視してTPPを推進する経済学」に恐れをせずにオブジェクションをとらえた。

座小田先生が想いを込めて「ふるさと」を語るのを聞き、「ふるさと」は私の心に根を下ろした。話題は『防災と復興の知』からは外れて行くが、私たちの「ふるさと」意識は、石川啄木の『一握の砂』によるところが多い。それは、風景、人々、言葉であり、祭礼、食だと言えよう。それらを手がかりに「ふるさと」を蘇らせようとしている東北地震の被災地の人々の報道に接して、却って元気づけられた人は多い。

定年退職後に富山に住み、立山の雄姿を飽きず眺めているうちに、私は、「ふるさと」意識も卑弥呼の時代に遡るのではないかと考えるようになった。

『古墳とその時代』（白石太一郎、2001）には、箸墓古墳の造営や葬祭に際して遠隔地の首長が参加したことが認められると述べられている。

ここから私の連想になる。各地の首長が参集したのなら、越中の王たちも参加したとしても不思議ではない。葬祭からの帰途、国境の峠から立山を望んで従者と共に感動を新たにしたのであろう。言葉が統一されるのは文字の使用を通してであろう。従って、3世紀の方言は今より極端だったはずである。峠から下って人々の言葉を聞いた王た

ちの安堵感は、今よりはるかに大きかったに違いない。これらはまさに「ふるさと」意識と行うことができよう。

卑弥呼とほぼ同時代に神通川流域を支配した王の墓と思われる王塚古墳（富山市婦中町。標高～120m。数 10 万年前に形成された高位段丘面）から素晴らしく立山が望めるのはもちろん、庄川流域から氷見を支配した王の墓と思われる桜谷古墳（高岡市太田。標高～20m。260 万年以前の第三紀層）からも、海を越えて立山が遠望できる。古代の人々は、立山が望め、交通の要衝を眼下におさめ、災害リスクが小さいことを意識して王が眠る場所を選んだに違いない。なお、桜谷古墳の下は、奈良時代中期、若き国司大伴家持が従者と馬を並べて駆けた渋谿（今の雨晴海岸）である。

このような考えに思い至ったとき、古代の人々の意識に触れたような気がしてうれしかった。

過去の大地の営みを探る学問は、文字による記録がない時代の人々の意識に触れるポテンシャルを持っている。それは自然科学の人文的可能性と言えるのではないだろうか。紙数の制約で論理が飛ぶが、文と理の2つの文化の隔絶を超えて学問が一層発展することを願ってこの稿を終えたい。

（かわさき いちろう 平成 22 年退職
元防災研究所教授 専門は地震学・測地学）
随想 地球科学と「ふるさと」意識
名誉教授 川崎 一朗
京大広報 2014.11 No. 705 p 4301